The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ハル敬語の形態変化の通時的考察 ： 大阪・京都の比較を通して
Author(s)	竹村, 明日香
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 2009, 43, p. 21-36
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/8674
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ハル敬語の形態変化の通時的考察

——大阪・京都の比較を通して——

竹　村　明日香

1．はじめに

現代近畿中央方言のいわゆるハル敬語（ハル・ヤハル）は、上接動詞との接続形態が大阪と京都で異なる。中井（1992・2002）を参照して、昭和20年代以降、両地で中心的に使用されている形態を「大阪型」(1)、「京都型」(2)と称して挙例すると、次のようになる。

(1) a.　中田さんが行きハル。

　　b.　中田さんが｛見／くれ／来／し｝ハル。

(2) a.　中田さんが行かハル。

　　b.　中田さんが｛見／くれ／来／し｝ヤハル。

しかし通時的にみた場合、上記の型は必ずしも両地で一貫していない。例えば山本（1962他）等によれば、大阪では、昭和40年直前まで(1)(2)を併用しつつ、五段動詞がヤハルに接続した(3)の形態（以下、五段動詞＋ヤハル）も用いていたことが報告されている。

(3) a.　中田さんが行きャハル。

　　b.　中田さんが行きヤハル。

また近年の京都では、非五段動詞[1)]のヤハルへの接続(2b)が、ハルへの接続(1b)に移行しつつある（岸江・井上1997参照）。

本稿は、このようなハル敬語における形態変化の要因を解明することを目的とする。具体的には、明治期以降の資料にみえる用例から、各形態の

出現傾向を指摘し、それらに屋名池誠氏の活用論を援用することで、変化要因に形態音韻論的な解釈を与える。なお本稿では、(1a)を「イ段ハル」、(2a)を「ア段ハル」と、便宜上、接続音に因んだ名称で用いることとする。

2．　先行研究と問題点の所在

ハル敬語の通時的な形態変化については、文献研究での用例を整理して「大阪型」「京都型」へのプロセスを考察した中井（2002）に詳しい。内容を私に要約すると、以下のようになる。

(4) a.　京都では、明治期の終わりには「京都型」が成立していた。

b.　大阪では、幕末にはすべての動詞がヤハルに接続していたが、明治期には五段動詞がイ段ハル(1a)になり、大正期には非五段動詞がハルへの接続(1b)へと移行していった。

(4a)のように、「京都型」が明治期から変動していない点については、明治期京都出身落語家のハル敬語を調査した辻（2009）の結果からも裏付けられる（表１）。他方、大阪は、文献例をまとめれば概ね（4b）のように描出できるが、山本（1950他）等の諸報告を考慮すると、昭和戦後期まで複雑な様相を呈していたことがうかがえる。特に問題となるのは、五段動詞の各形態の出現順とその変化要因である。

発表年	演目		五段動詞	一段動詞	変格動詞
明治32	舩辨慶	ア段ハル	いわはる(云)	—	—
明治32	按摩	ア段ハル	いかはる(行)	—	—
		ヤハル	—	—	きやはる
明治43-44	夢	ア段ハル	怒らはる　癒(なお)らはる 行かはる	—	—
		ヤハル・ハル	云ひやはる　往にやはる 喰はしやはる　落籍(ひき)やはる	居やはる(5)	しはる

【表1】京都出身落語家の明治期落語におけるハル敬語（辻2009を参照）

前田（1949・1977）、楳垣（1946・1962）、山本（1950・1962）は、ヤハルがハルに、そしてア段ハルがイ段ハルに先立つという内省や、昭和37年当時の大阪では（1a）（2a）（3a）（3b）を併用しているという状況に基いて、五段動詞に以下のような発生過程を推定した。

(5) a.　行きヤハル＞行きャハル・行かハル＞行きハル

b.　行きヤハル＞行きャハル＞行かハル・行きハル

c.　行きヤハル＞行きャハル＞行かハル＞（ハルを析出して行きヤハルに代入）＞行きハル

（5a は前田1949、5b は楳垣1962、5c は山本1950・1962）

これらは、音変化を形態変化の主要因とみなしている。そもそもハル敬語はナサル＞ナハル＞ヤハルという音変化から生じたと考えられているため[2)]、(5) の諸説もその音変化の延長線上に想定されている。(5) のうち、ヤハルがハルに先行することは、鈴木（1967）や彦坂（1984）、辻（2002）の近世期資料調査により確認された。しかし一方で、金沢（1993・1998）のような、(5) に対する反例も存在する。

金沢（1993・1998）は、明治 - 大正期の大阪落語を調査した結果、明治期にはすでにイ段ハルが使用されていたことを指摘した。氏の調査結果からハル・ヤハルの用例のみを掲出すると、表 2 のようになる。

発表年	資料		五段動詞	上一段動詞	下一段動詞	変格動詞
明治23-27	速記本	ヤハル	—	居やはる(8)	—	—
		ハル	行きはる	—	くれはる(2)	—
明治36-大正15	SP レコード	ヤハル	—	居やはる	—	—
		ハル	言いはる(2) 行きはる 聞きはる 付き合いはる	—	くれはる(5)	しはる(2) 来はる

【表2】大阪出身落語家による明治－大正期落語のハル敬語（金沢1998を参照）

五段動詞にはイ段ハルしか見られない。よって、大阪では (5) を経ずに、行きナハル＞行きハルと直接的に変化し、行かハルは後年「京都などから外的な形でもたらされた」（1998：219）のではないかとする見解を示した。

金沢氏の発見は重要であるものの、一方で (5) の根拠となった諸氏の内省や報告と整合性が取れないという疑問を残した。明治期にすでにイ段ハルが盛行していたのならば、昭和戦後期にイ段ハルが「新風」（前田1977：191）と認識された理由が説明できないのである。このように、音変化での推定では文献例と齟齬をきたすため、否定の接辞ヘンとの関連が示唆される場合もあるが（金沢1998）、未だ結論は導かれていない。

一方、安井（2008）は、大正末 - 昭和初期の船場言葉を残す『細雪』から 4 姉妹のハル敬語を精査し、上接動詞との接続形態に注目した分析を行った。結果、一段動詞では語幹音節数によってヤハル・ハルが使い分けられ、五段動詞では「a はる型[3)]」を次女が、「やはる型の拗音のもの」を末娘が多用すると示した。中でも、やはる型の拗音のものは、末娘の素行の悪さを表現するものと位置づけている。

しかし、安井氏が提示した五段動詞の「やはる型」は、ｗ末尾語幹動詞（例　言う）と「なる」１例以外、人物を問わず全用例が拗音化している点が注意される。これらがただ、形態的に拗音化しやすいという理由で生じているならば、「a はる型」「i はる型」にも出現傾向に形態上の理由が存在するはずである。また、それらの規則性を分析すれば、変化要因の解明にもつながると予測される。

そこで本稿では、ハル敬語と上接動詞の形態分析に重点を置き、それらの記述を通して通時的な変化要因を追究する。

３．調査資料と調査方法

調査資料には、京阪を舞台とした小説[4)]28作品、落語資料71作品、談話資料を使用し、それらを発表年に従って 4 期に配した（明治期、大正期、昭和戦前期、昭和戦後期）。ただし談話資料は現象の観察のみにとどめ、計量的調査からは除外した（各資料の詳細は稿末に記載）。

調査対象は、台詞・心内文・手紙文に現れた「動詞＋ハル・ヤハル」に限定した。ただし音融合形（例　しとかはる）は対象外とする。複合動詞は、助詞テやニを含まないものに限って認め、複合カ変・サ変動詞はいずれも単音節語幹のカ変・サ変動詞として扱った。

採取した用例は、まずハル・ヤハルに接続する上接動詞を、語幹音節数と動詞の種類で下位分類し、五段動詞にはア段・イ段ハルの区別も行った。

4．調査結果

調査結果の概観が、表3-1と表3-2である。

表3-1の京都によると、五段動詞は明治期以降、ア段ハルのみを専用していて変化がない。また単音節語幹動詞も著しくヤハルへの接続に偏る。

一方、表3-2の大阪では、五段動詞のア段・イ段ハルの用例数を作品ご

			ハル・ヤハル	ハル								ヤハル						
			語幹音節数	単音節				複音節				単音節				複音節		
期	年	資料番号	動詞の種類	上一	下一	カ	サ	五段		上一	下一	上一	下一	カ	サ	五段	上一	下一
			作品＼接続					ア段	イ段									
明治	40	①	風流懺法					4(3)						2		1		
	42	②	続風流懺法					2(2)						2		2(2)		
	43	③	夢				1	3(3)				5(1)				4(4)		
大正	1	④	蜘蛛					7(7)			1	2(1)		2	2			2(2)
	2	⑤	雛勇					11(8)					1	5	2		1	
	8	⑥	風流後日譚					18(10)		1	5(2)	17(2)		15	7	2(1)		4(4)
	11	⑦	黒髪											1				
	11	⑧	狂乱					6(3)				3(1)	1					5(1)
	11	⑨	霜凍る宵					8(5)			2(1)	2(1)		1	4	2(2)		1
	14	⑩	兄との関係					1										
	15	⑪	父子一面												1			
戦前 昭和	9	⑫	祇園しぐれ					11(8)			3(3)	4(1)	2(1)	5	8			4(1)
	14	⑬	暖簾					4(4)			2(2)	1	1		1	1		
戦後 昭和	36	⑭	古都					38(22)		1	19(7)	10(3)	3(1)	6	8			3(3)
	38	⑮	越前竹人形					52(20)			47(7)	15(1)	1	13	10			

【表3－1】 京都　　注 (1) (　)は異なり語数を示す。「いやはる(言)」は複音節語幹の五段動詞に含めた。

			ハル・ヤハル	ハル								ヤハル						
			語幹音節数	単音節				複音節				単音節				複音節		
期	年	資料番号	動詞の種類	上一	下一	カ	サ	五段		上一	下一	上一	下一	カ	サ	五段	上一	下一
			作品＼接続					ア段	イ段									
明治	36-40	⑯	明治SP落語				1		2(2)									
	40	⑰	大内旅宿					2(2)				9(1)		1	1	5(5)	1	2(1)
大正	2	⑱	ぽんち												2	3(2)		
	3	⑲	鱧の皮					1	1							2(1)		
	3	⑳	天満宮					11(5)			4(3)	4(2)		5		10(6)		
	9	㉑	長い恋仲	1							1				1			
	9	㉒	父親											1		2(2)		
	12	㉓	大正SP落語			1	1		3(2)		5(1)	1						
	14	㉔	十六歳の日記					8(5)					1					5(1)
	14-15	㉕	大阪の宿					56(18)	2(2)		4(4)	49(2)	1	4	13	2(1)		
昭和戦前	8	㉖	釜ヶ崎						1		1							
	9	㉗	大阪の話			1			1		1							
	11-15	㉘	上方はなし	6(2)	2(1)	9	4	3(3)	16(11)	2(1)	33(3)	9(2)	1	7	6	21(7)		
	18	㉙	わが町			1	1	4(3)	14(12)		18(7)			10	4	5(1)		
昭和戦後	26-27	㉚	十三夜	1	2(1)	2		1	6(5)		2(1)							
	33	㉛	船場狂い	2(1)		1	1		6(6)		1							
	33	㉜	花のれん	2	2(1)	8	28	2(2)	62(29)		38(10)	2(1)		2				
	52	㉝	泥の河			1	2	1	5(5)									

【表3－2】 大阪　　注 (1) (　)は異なり語数を示す。「いやはる(言)」は複音節語幹の五段動詞に含めた。
(2) ㉜では、京都西陣出身者の「行かハル」1例を除外した。

とに比較すると、大正期の㉕まではア段ハルが優勢だが（⑯㉓を除く[5]）、昭和戦前期の㉖以降は一転してイ段ハルが優勢になる。ここからみれば、大正と昭和の間を境に、ア段ハルとイ段ハルが勢力を逆転したといえる。前田（1977）がイ段ハルを「新風」と表現したのも、この情勢を反映したものと思われる。

ところで、大阪でもう一つ注目されるのは、ヤハルの動向である。

大阪では、昭和戦前期以降、ア段ハルが衰退するのとほぼ同時期に、ヤハルの用例が非五段動詞の複音節語幹動詞から徐々に姿を消し（㉖以下）、昭和戦後期では、単音節語幹動詞にも現れなくなる（㉚㉛㉝）。

従来、このようなヤハルの衰退は、「ハル統合現象」と理解されてきた（中井1992）。接続形態をハルに統一し、五段・非五段動詞でハル・ヤハルを使い分ける煩雑さを解消したとする見方である。これは合理化という観点からは支持されるものの、なぜハルへの統合とア段ハルの衰退が同時期になるのかが判然としない。単純な統合現象であるならば、五段動詞は大正期から主流であったア段ハルを保つはずである。ア段ハルとヤハルの衰退時期が重なる背景には、両者の形態的な関連性が予想される。また、(3)のような五段動詞＋ヤハルがア段ハル優勢の大正期以前に偏って併用されるのも（⑰⑱⑲⑳㉒㉕）、この点に関与すると考えられる。

そこで、表3-1・3-2で、ヤハル全体とア段ハルを対照させると、両者の出現には規則性のあることがうかがえる。例えば大阪では、ヤハルが出現する資料ではア段ハルが優勢になるか（⑰⑳㉔㉕）、数例は出現するのに対し（⑲㉘㉙㉜）、ヤハルが出現しない資料ではア段ハルが優勢になる資料はなく、その場合は必ずイ段ハルが優勢になる（⑯㉖㉗㉚㉛㉝）。この規則性は、『全国方言資料』4（大阪府大阪市）でも確認される。明治生まれの話者（男性：31年生、女性：21年生）は、イ段ハルを使用する一方で、ヤハルも用いており（6a）、その際にはア段ハルも現れる（6b）。

(6) a.　ハナビヤガ　キマスシナー（中略）ハナシオ　ナガシテ　キヤハルシ　シンナイ　クルシ…　女性話者、201頁

b.　イマ　ヤッパリ　ヤラハンノワ　アモツキ　デスナー　男性話者、191頁

以上のように、各形態が相互関連をもって出現・衰退しているとすれば、形態の記述においても関連性が明示される方法が望まれる。そこで本稿では、これらを可能にする屋名池（1987他）の記述方法を採用する。次節では、氏の活用論と記述方法を概略的に紹介する。

5．屋名池（1987他）の活用論と記述方法

屋名池（1987他）では、述部から、有意味の共通形態「前部要素」「後部要素」と、それらの間に位置する無意義形態「活用部」を抽出した後、三者を定式化して記述する。例えば、「書かない」「起きない」、「書けば」「起きれば」という述部は、それぞれ次のように記述される。

(7) a.　kak［ a ］nai　　oki［ # ］nai

b.　kak［ # ］eba　　oki［ r ］eba

前部要素は kak・[6] と oki・、後部要素は nai と eba である。活用部は、前部要素と後部要素が子音・母音同士で連接する場合に、a や r などの母音・子音を介在させて、CV 構造を保持する。「#」は、活用部に形態素が存在しないことを仮設的に示す。

前部要素は、子音末尾の強変化動詞（五段動詞）と、母音末尾の弱変化動詞（上・下一段動詞）の 2 種に類別される[7]。前部要素はこの 2 種以外を持たないため、同一後部要素に対する活用部の表記は、［強変化動詞活用部　弱変化動詞活用部］として(8)のように並列表記される。

(8) a.　［ a　# ］nai

b.　［ #　r ］eba

後部要素も、 eba のような母音はじまりの強式と、 nai のような子音はじまりの弱式の 2 種に類別されるが[8)]、両者は形態的な安定性を欠く。強式から弱式へ、弱式から強式へという移行が日本語諸方言に見られ、これが語形のゆれとなって現れている。結論を先取りすると、ハル敬語の形態変化も、この後部要素のゆれが要因とみなされるものである。

次節では、上記の記述方法に基づいてハル敬語の形態構造を記述し、変化の様相を考察する。

6．ハル敬語の形態分析

ハル敬語の形態構造一覧は、以下の通りである。

(9) a． 旧京都・大阪式 ［ ＃　 j ］ ahar・ 行かハル／見ヤハル
　　b． ヤハル拗音形 ［ ＃　 ＃ ］ jahar・ 行きャハル／見ヤハル
　　c． ヤハル非拗音形 ［ i　 ＃ ］ jahar・ 行きヤハル／見ヤハル
　　d． 新京都式 ［ a　 ＃ ］ har・ 行かハル／見ハル
　　e． 現大阪式 ［ i　 ＃ ］ har・ 行きハル／見ハル

「現大阪式」等は形態構造の名称である。強変化動詞は「行く」、弱変化動詞は「見る」で代表させて、以下で具体的な検討を試みる。

6.1　京都での形態変化――旧京都・大阪式から新京都式へ――

京都では、強変化動詞にア段ハル（10a)、弱変化動詞にヤハル（10b）を使用する例が、明治期から昭和戦後期まで続く。

(10) a． 三千歳はん、一念はんが帰らはつて淋(さぶ)しおすやろ。 ①51頁
　　b． それから、色まで西洋の流行を考へやはつてな。 ⑭275頁

これらを記述すると、次のようになる。

(11) a． ［ ＃　 j ］ ahar・
　　b-1． ik［ ＃ ］ahar・ b-2． mi［ j ］ahar・

後部要素は母音はじまりの強式である。強変化動詞は後部要素と直結するが、弱変化動詞は半母音 j を活用部に介在させて、母音の連接を避ける。これは(2)の「京都型」に当たる。第 4 節で述べたように、この形式は大阪でも大正期まで使用されたため、旧京都・大阪式とも呼べる。

しかし岸江・井上（1997）によると、近年の京都市の10・20代では、約80%が弱変化動詞にヤハルではなくハルを用いているという。この新しい形態構造を、新京都式として示せば、(12)のようになろう。

(12) a.　［ a　＃ ］ har・

b-1.　ik ［ a ］ har・　b-2.　mi ［ ＃ ］ har・

後部要素が、子音はじまりの弱式に転じている。これは（11a）の後部要素先頭 a を活用部に取り込んだ構造である。

(12)の発生要因は、活用部の異分析と推定される。強変化動詞の…C ［ ＃ ］ ahar・は、…C ［ a ］ har・と異分析されると、後部要素が子音はじまりの弱式に変わり、弱変化動詞は活用部の j が不要となって脱落する。これが、若年層でのヤハルのヤの脱落に相当する。

後部要素先頭の母音を活用部に取り込む類例には、八丈島大賀郷方言の［ ＃　r ］unoowa と［ u　＃ ］ noowa があり（屋名池1987：203)、この場合も弱式化により弱変化動詞の活用部介在音が脱落している。よって、新京都式も、日本語諸方言にみられる弱式化の一例と位置づけられる。

6.2　旧京都・大阪式の弱式化――ヤハル拗音形とヤハル非拗音形――

第 4 節では、五段動詞＋ヤハルがア段ハル優勢の時期に併用されやすいことを指摘したが、両者が併用される例は 1 作品内でも往々見られる。

(13) a.　嬢やんが生れて直き死にやはつて、（後略）　⑳236頁

b.　西さんの奥さんが死なはつたんや。　⑳245頁

五段動詞＋ヤハルには、(3)のように 2 形態がある。(3a)をヤハル拗音形、

(3b)をヤハル非拗音形と称して構造を記述すると、次のようになる。

(14) a.　ヤハル拗音形　ik ［＃］ jahar・（行きャハル）

b.　ヤハル非拗音形 ik ［ｉ］ jahar・（行きヤハル）

(14a)では、前部・後部要素が直結するのに対し、(14b)では、活用部にｉが介在する。このように同一の後部要素でありながら活用部が異なるのは、後部要素先頭の半母音ｊの性質が関与していると見られる。

半母音ｊは、「母音と子音，両者の性格を併せ持ったもの」（屋名池 1988a ：89）であり、「Ｃの後ではＶあつかいされ；Ｖの後ではＣあつかいされる」（同上：88）という性質を持つ。そのため、子音末尾の強変化動詞は母音としてのｊに直結し、拗音形（14a）を必然的に生じる。安井（2008）で五段動詞のやはる型に拗音形が頻出するのは、こうした形態上の理由によると考えられる。しかし一方で、ｊは旧京都・大阪式の弱変化動詞活用部の介在音でもあるように、子音として扱われる場合もある。その際には、強変化動詞は子音連接を忌避して活用部にｉを介在させるため、(14b)のような非拗音形が成立する。

さて、ここで旧京都・大阪式とヤハル拗音形・非拗音形を比較してみる。

(15) a.　旧京都・大阪式　［＃　ｊ］ ahar・

b.　ヤハル拗音形　［＃　＃］ jahar・

c.　ヤハル非拗音形　［ｉ　＃］ jahar・

(15b)(15c)は、(15a)の活用部介在音ｊを後部要素先頭に取りこんだ構造であることがわかる。これらの発生要因も、新京都式と同様、活用部の異分析にあると推測される。弱変化動詞の…Ｖ［ｊ］ahar・は、…Ｖ［＃］jahar・と異分析されると、後部要素がjahar・と弱式化する。それが強変化動詞にも適用された結果、(14a)(14b)のような、五段動詞＋ヤハルが生じたと考えられる。したがって、ア段ハルと五段動詞＋ヤハルが併用されやすい理由は、後者が前者の弱式化であるという、構造上の連続性

に起因するためと見なされる。なお、活用部の介在音が取り込まれて弱式化する類例には、長崎県諫早市方言の［ ＃　s ］as・と［ a　＃ ］sas・があり（屋名池1988b ：88)、ハル敬語にのみ特殊な例ではない。

6.3　大阪での形態変化――現大阪式――

大阪では、旧京都・大阪式（9a）とその弱式化の（9b）（9c）を経た後、昭和期に入ってから形態構造が大きく転換した。強変化動詞にイ段ハル(16a)、弱変化動詞にハル(16b)を使用するこの構造を、現大阪式と称して記述すると、(17) のようになる。これは（1）の「大阪型」に当たる。

(16) a.　他人さんが聞きはったら、ええ笑いもんや　㉛416頁

b.　御寮人さんという人しか、居はれへんのや、　㉛427頁

(17) a.　［ i　＃ ］har・

b-1.　ik［ i ］har・　b-2. mi［ ＃ ］har・

この現大阪式の特徴は、次の２点に集約される。１点は強変化・弱変化動詞ともにヤハルを生じない点であり、もう１点は活用部が大部分の接辞と等しい［ i　＃ ］という構造をとる点である。

前者は、換言すれば、ヤハルという異形態を排除することにより、ハル敬語の体系を経済化したということになる。ヤハルは本来、弱変化動詞のみに使用されていたが、旧京都・大阪式が弱式化した結果、強変化動詞にも用いられるようになった。具体的には、行かハルの他に、行きャハル・行きヤハルといった形態も生じるようになったことを指す。しかし、このように複数の形態が明確な機能差[9)]を備えずに存在することは、聞き手に記憶の負担を強いるなどして、言語体系上、望ましい状況ではない。よって現大阪式は、形態構造の転換によってそれらを排除し、ハル敬語体系内を経済化したものと見なせる。

なおその際、現大阪式が［ i　＃ ］を選んだ理由には、活用部の無標

化が想定される。屋名池（1988c：73）が述べるように、［ ＃　ｊ ］は oo（ヨウ）、［ ａ　＃ ］は否定の na-（ナイ）や zu（ズ）といった特定の後部要素を予告する機能をもった有標の活用部である。これらに対し、tai（タイ）や mas-（マス）など大部分の接辞がもつ活用部［ ｉ　＃ ］は無標であって、そうした特定の指定を必要としない。ハル敬語もそうした接辞の１つであるため、現大阪式は、有標の活用部［ ＃　ｊ ］［ ａ　＃ ］との重複から脱却し、［ ｉ　＃ ］へ転じたと考えられる。

７．　まとめ

本稿では、以下のことを述べた。

（18）ａ．　ハル敬語の形態構造は、(9)のように５種類に記述できる。

ｂ．　京都におけるハル敬語の形態変化は、後部要素の弱式化（9a →9b・9c・9d）に起因すると考えられる。

ｃ．　大阪におけるハル敬語の形態変化は、後部要素の弱式化（9a →9b・9c）に加え、ハル敬語体系の経済化と活用部の無標化（9a →9e）に起因すると考えられる。

以上のように、ハル敬語の通時的な変化は、音変化ではなく、ハル敬語語頭での形態的なゆれが要因と解釈できる。戦後、大阪と京都で変化の方向が相違した点については、言語外的要因の検討も含め、今後の課題としたい。

注

1）本稿では、上・下一段動詞およびカ変・サ変動詞を「非五段動詞」と称して、五段動詞と対比的に捉える。

2）ハル敬語の語源には、ナサル出自説とシャル出自説があり、現在は前者が認められている。なお奥村（1966：108）は、ア段ハル（読まハル）の成立についてナサル出自説を支持しながらも、「その成立に際しては、その他の語形――ヨマシャルやヨマサルでなくても、とにかく、未然形接続のもの――が影響したかもしれない」と述べて、他の語形からの影響をも示唆している。

3）ハル敬語の形態名の対応を「安井（2008）：本稿」の順に示す。aはる型：ア段ハル、iはる型：イ段ハル、やはる型の拗音のもの：ヤハル拗音形。

4）小説の選定には、木村（1981）藤本（1981）を参照した。

5）⑯㉓だけが同時期の小説と異なる様相を示す理由については、本稿では明らかにできない。ただ、この2資料は録音文字化資料であるため、元より文字資料の小説とは資料性の相違が反映されている可能性もある。

6）屋名池氏に倣って、動詞末尾には「・」、形容詞末尾には「-」を付す。

7）カ・サ変動詞は別に設定されるが（屋名池1989：88）、本稿では省略する。

8）強式・弱式の名称と概念については、中山（1981）より借用されている。

9）ハル・ヤハルの機能差、すなわち待遇差については諸説あるが、十分に検証されているとは言い難い。なおア段ハルとイ段ハルを同等とみなす話者の発言（前田1949：232）もあることは、形態差が待遇差に関与しないことを示す好例として注目される。

〈参考文献〉

楳垣実（1946）『京言葉』高桐書院

――――（1962）「近畿方言総説」楳垣実編『近畿方言の総合的研究』三省堂

奥村三雄（1962）「京都府方言」楳垣実編『近畿方言の総合的研究』三省堂

――――（1966）「敬語辞系譜考――近代京阪語研究の一環として――」『国語国文』35-5

金沢裕之（1993）「尊敬の助動詞「ハル」の成立をめぐって――明治期大阪語の場合――」『阪大日本語研究』5

――――（1998）『近代大阪語変遷の研究』和泉書院

岸江信介・井上文子（1997）『京都市方言の動態』近畿方言研究会

木村東吉（1981）「近代文学に現れた全国方言　近畿（一）――三重県・滋賀県・京都府・奈良県・和歌山県」藤原与一先生古稀御健寿祝賀論集刊行委員会編『藤原与一先生古稀記念論集方言学論叢Ⅱ――方言研究の射程――』三省堂

鈴木勝忠（1967）「方言資料としての雑俳」『国語国文』36-2
辻加代子（2002）「京都市方言・女性話者の談話における「ハル敬語」の通時的考察――第三者待遇表現に注目して――」『社会言語科学』5-1
――――（2009）『「ハル」敬語考　京都語の社会言語史』ひつじ書房
中井精一（1992）「関西共通語化の現状――大阪型待遇表現形式の伝播をめぐって――」『阪大日本語研究』4
――――（2002）「尊敬の助動詞「ハル」の成立とその定型化」『日本近代語研究』3
中山昌久（1981）「動詞活用の種類とその記述用法」『国語と国文学』58-3
彦坂佳宣（1984）「近世後期上方語資料としての雑俳――ナ変・敬語辞を例として――」『文芸研究』107
藤本千鶴子（1981）「近代文学に現れた全国方言　近畿（二）――大阪府・兵庫県」藤原与一先生古稀御健寿祝賀論集刊行委員会編『藤原与一先生古稀記念論集方言学論叢Ⅱ――方言研究の射程――』三省堂
前田勇（1949）『大阪弁の研究』朝日新聞社
――――（1977）『大阪弁』朝日新聞社
安井寿枝（2008）「『細雪』四姉妹の待遇表現――尊敬語に見られる特徴――」『日本語の研究』4-2
屋名池誠（1987）「活用――現代東京方言述部の形態＝構文論的記述［2］――」『学苑』565
――――（1988a）「語――同上［4］――」『学苑』577
――――（1988b）「活用・再論――同上［2］・補遺――」『学苑』579
――――（1988c）「「活用論」――同上［2］・補遺2――(2)諸説の批判的検討」『学苑』588
――――（1989）「「活用論」――同上［2］・補遺2――(3)諸説の批判的検討（承前）」『学苑』591
山本俊治（1950）「大阪方言における待遇法(1)」『近畿方言』7
――――（1962）「大阪府方言」楳垣実編『近畿方言の総合的研究』三省堂

〈使用テキスト〉

①高濱虚子『風流懺法』（明治文学全集56、筑摩書房、1967）②高濱虚子『続風流懺法』（同上）③桂文吾口述「夢」（『大阪時事新報』明治43年12月17日－同44年1月15日）④長田幹彦『蜘蛛』（『長田幹彦全集』2、日本図書センター、1998）⑤長田幹彦『雛勇』（同上）⑥高濱虚子『風流懺法後日譚』（①に同じ）⑦近松秋江『黒髪』（『近松秋江全集』4、八木書店、1992）⑧近松秋江『狂乱』（同上）

⑨近松秋江『霜凍る宵』（同上）⑩佐佐木茂索『兄との関係』（現代日本文学大系45、筑摩書房、1973）⑪佐佐木茂索『父子一面』（同上）⑫長田幹彦『祇園しぐれ』（『長田幹彦全集』13、日本図書センター、1998）⑬真下五一『暖簾』（『ふるさと文学館【京都Ⅰ】』、ぎょうせい、1993）⑭川端康成『古都』（『川端康成全集』18、新潮社、1980）⑮水上勉『越前竹人形』（現代日本文学大系89、筑摩書房、1972）⑯㉓真田信治・金沢裕之編（1991）『二十世紀初頭大阪口語の実態――落語 SP レコードを資料として』大阪大学文学部社会言語学講座 ⑰高濱虚子『大内旅宿』（①に同じ）⑱岩野泡鳴『ぼんち』（現代日本文学大系21、筑摩書房、1970）⑲上司小剣『鱧の皮』（同上）⑳上司小剣『天満宮』（同上）㉑宇野浩二『長い恋仲』（現代日本文学大系46、筑摩書房、1971）㉒里見弴『父親』（現代日本文学全集25、筑摩書房、1956）㉔川端康成『十六歳の日記』（『川端康成全集』2、新潮社、1980）㉕水上瀧太郎『大阪の宿』（現代日本文学大系45、筑摩書房、1970）㉖武田麟太郎『釜ヶ崎』（現代日本文学大系70、筑摩書房、1973）㉗藤沢恒夫『大阪の話』（現代日本文学全集86、筑摩書房、1957）㉘五代目笑福亭松鶴編『上方はなし』（三一書房、1972）より、1猿後家 2人形買 3たちぎれ線香 5子は鎹 8市助酒 10吉野狐 11天王寺詣り 16借家怪談 17貝野村 18口入屋 20尻餅 21土橋万蔵 23百年目 24貧乏花見 25莨の火 26船弁慶 27千両みかん 28仔猫 29菊江仏壇 30三枚起請 34天神山 40後家馬子 41鮑貝 43悋気の独楽 44猫の忠信 45くしゃみ講釈 48雑穀八 49鴻池の犬、以上28作品㉙織田作之助『わが町』（『定本織田作之助全集』3、文泉堂書店、1976）㉚金沢裕之（1998）『二代目桂春団治「十三夜」録音文字化資料』岡山大学文学対照日本語学研究室㉛山崎豊子『船場狂い』（『山崎豊子全集』1、新潮社、2003）㉜山崎豊子『花のれん』（同上）㉝宮本輝『泥の河』（『螢川・泥の河』、新潮社、1994）

京都府教育委員会編（1987）『京都府の方言――京都府方言収集緊急調査報告書――』京都府教育委員会

日本放送協会編（1999）『全国方言資料（CD-ROM 版）』4、日本放送出版協会

【付記】本稿は第264回近代語研究会例会（2009年 6 月27日）での発表に基づく。発表の際に有益な御指摘を賜った先生方、指導教官の岡島昭浩准教授、貴重な資料を御教示下さった辻加代子氏に記して感謝申し上げる。

（大学院博士後期課程学生）